

# Death Education Program の導入時期に関する検討

## Appropriate Introductory Timing of Death Education Program

坂田 和子・牧 正興  
Kazuko Sakata · Seikou Maki

本研究は、青少年における諸問題の予防的アプローチとして Death Education Program (死の意味と生命の尊厳を伝えるための“死に対する準備教育プログラム”)を導入するための導入時期について検討することを目的とした。調査対象は就学前の子どもを持つ親であり、1) 子どもに生命の大切さを伝える必要性の程度、2) 子どもに死について伝えていく必要性の程度、3) 身近な人や動物の死に直面したときに子どもにどのような説明をしたか、を含む質問紙調査を実施した。その結果、生命の大切さと同様、死について子どもに伝える必要性を高い割合で感じていることが明らかとなった。しかしながら、実際に死に直面した時に子どもに対し死の現実を説明できていない現状が示された。これらの結果を踏まえ、Death Education Program を幼児期に導入することの意義について議論した。

キーワード：Death Education Program、幼児期、死の概念の発達

### 問 題

近年、命そのものを軽視しているような青少年の事件が表面化してきている。自殺(インターネットを介して知り合ったメンバーでの集団自殺等)や年少児童への殺人、児童の殺人など、犯罪や事件の低年齢化そして短絡的な犯行内容が指摘されている。

現在、学校教育(保育)現場では、子どもたちの変化に対応して生命尊重等の教育を導入していることが報告されている。それらの教育内容は、“生きる”ことの大切さを伝え、間接的に“死”を意識させることによって、さらに“生きる”ことを重みづけしているものが中心である。“死”について直接的に言及しないこれらの教育は、本邦の過去の歴史上の諸問題と文化的背景、さらには宗教と教育との関係や家族構造の変化など、複雑な問題が関係している(中央教育審議会、2003)、慎重を期す問題として扱われている。

本邦においては、“死”に関するタブー化が進行した時期があり、その時期は第二次世界大戦後50年あまりの間であると言われている(澤井、2000)<sup>1)</sup>。そのタブ

ー化の中で制定された学校教育法体系の中で、現状の“死”に関する内容を暗に含みながら触れることができない教育が実施されていることは社会背景上理解可能である。しかしながら、“生きる”ことをのみを強調した生命尊重教育を行っているにも関わらず頻発する青少年の事件のことを考えると、現在の生命尊重教育だけでは限界があるのではないだろうか。生と死が隣り合わせにあることや表裏一体であることなどの次元性について、正しく理解しないまま混沌とした青年期を迎えている、本邦の青少年の現状が示唆される。

丹下(2004)<sup>2)</sup>によると、中学の間は全体として学年が上がるにつれて次第に死を恐れる気持ちが薄れるとともに、死を苦難からの解放と見なす考えを否定しなくなることが指摘されている。さらに、困難な状況下でも最後まで生き続けようという意識が弱まったり、身体のみを生に執着しない気持ちが強まるという形で、生に対する積極的な態度も減少することも明らかになっている。そしてその態度は高校生になってもほとんど変化がない。これらの結果は、中学生においてすでに現実の生活からの解放という形で死をとらえたり、身体とは別の生の存在を考えており、中学生や高

校生における Death Education の難しさや導入時期の遅さについて示している。

児童期に関する研究では、子どもの死の概念の理解や死別体験の与える影響についての研究が多い (Speece & Brent, 1984; 岡田, 1998; 筒井, 1998; 藤井2002)<sup>3)4)5)6)</sup>。

仲村 (1994)<sup>7)</sup>によると、児童期あたりから死の現実的意味である普遍性、体の機能の停止、非可逆性を理解するようになる。つまり、誰でもいつかは死ぬし、死によって体の機能は停止するし、再び生き返ることはできないことを理解する。そしてこれらの自覚から死は自分にも起こり得ると考えるようになり、それはやがて死後の世界への想像、願望、希望が膨らみはじめると思われる。特に児童期の中で、年齢が高くなるにつれて人間は死んだらまた生まれかわるといふ「生まれかわり思想」の増加が目立ったことを明らかにしている。

この結果は、ピアジェの認知発達と関連して、死の概念も児童期に発達していくことを示しており、そして死を理解した後には死への憧れなるものが出てくることを示唆している。

これらのことから、Death Education Program の導入に関して、学校教育体系の中だけで考えるのではなく、死の概念を理解する前の子どもたちへのアプローチも視野に入れて検討していく必要があると思われる。アメリカ国立精神保健研究所の報告によると、子どもに「死」を教えることは重要であることが結論づけられおり、やはり年少の子どもたちへの「死」に関する教育を模索していることが伺える。

本研究では、青少年における諸問題の予防的アプローチとして Death Education Program を導入するための導入時期について検討するために、坂田・牧 (2003, 2004)<sup>8)9)</sup>を踏まえ、年少の子どもに対して死の問題がどのように扱われているかを分析することを目的とする。

## 方 法

【対 象】：福岡・佐賀県内の6幼稚園 (公立1園、私立5園)に通う3～6歳の子どもをもつ保護者のうち、質問紙に回答した404名 (母親397名：20歳～50歳；35±4.1歳、父親6名：33歳～53歳；43.5±7.69歳、

祖母1名：65歳)。

【質問紙】：園の設置主体ならびに教育方針、さらに家庭における信仰宗教が本研究結果に影響を与えることを踏まえ、幼稚園用と保護者用の質問紙を作成した。(幼稚園用質問紙)

- ① 園名
- ② 園の設置主体 (宗教との関係)
- ③ 教育方針に生や死の教育指導を取り入れているか
- ④③の教育は何歳から実施されているか
- ⑤ 在園児数

以上の項目について、各園に選択記入方式による回答を求めた。

(保護者用質問紙)

- ① 記入者の年令・性別
- ② 子どもの年齢・性別
- ③ 記入者と子どもとの関係、
- ④ 同居している家族構成
- ⑤ 信仰宗教の有無、
- ⑥ 信仰心の程度
- ⑦ 生命の大切さを子どもに伝える必要性の程度
- ⑧ 必要性を強く感じている人のきっかけと年齢
- ⑨ 死について子どもに伝える必要性の程度
- ⑩ 身近な人の死の経験の有無 (記入者)
- ⑪ 身近な人の死の経験の有無 (子ども)
- ⑫ 身近な動物の死の経験の有無 (子ども)
- ⑬ 子どもにどのような説明をしたか

以上の項目について、無記名選択記入方式による回答を求めた。

【分析方法】：

生命の大切さと死について伝える必要性について 回答から必要性の程度の平均、分散、相関を求めた (SPSS 11.0)。

子どもへの説明 身近な人や動物の死について保護者がどのような説明を子どもに行ったか、説明の現実性という観点から KJ 法による分類を行った。評定者は2名で、評定者間の評定一致率は88.9%であった。不一致の項目については、分類基準の確認を行い、一致率が100%になるまで訓練した。なお、評定者で決めた分類基準は以下のとおりである。

分類基準①

非現実的説明+のみ、非現実的説明+非現実的説明、非現

実的説明+現実的説明、現実的説明+のみ、現実的説明+非現実的説明、現実的説明+現実的説明、回避、その他

### 結果および考察

本研究における調査対象園の設置主体は、キリスト教系2園(回答総数137)、仏教系2園(回答総数85)、宗教と無関係2園(回答総数181)であり、そのうち明確な信仰宗教があると回答した保護者は全体の20.0%であった。

#### 生命の大切さを子どもに伝える必要性について

生命の大切さを子どもに伝える必要性に関しては、全くないから強く感じるの5件法(1~5)で質問した結果、 $4.5 \pm 0.7$ であった。また、そのように感じたきっかけは、

- ①自分自身の経験(近親者の病死・交通事故死、友人の自殺・事故・病死ペットの死、事故現場に遭遇して、葬儀・通夜の参列、小学時の生命尊重教育や戦争体験話を聞いて、実家の信仰宗教上、職業柄(看護職)、子どもの妊娠・流産・死産・出産、子どもが障害を持っている、子どもの病気、葉っぱのフレディを読んで、難民のドキュメンタリー番組を見て、など)、
- ②子どもの行動(虫を平気で殺すようになった、平気で“殺す”“死ね”などの言葉を使うようになった、死について質問してきた、テレビゲームにおける死のバーチャル体験、など)、
- ③社会での出来事(犯罪の低年齢化(長崎の駿ちゃん事件、神戸の児童連続殺傷事件)、いじめ・自殺・殺人・事故・虐待の報道、高齢化など)などが挙げられていた。

#### 死について子どもに伝える必要性について

次に死について子どもに伝える必要性に関して、5件法による質問の結果、 $4.1 \pm 0.8$ であった。そのうち、89.6%の保護者と32.4%の子どもが身近な人の死を経験し、36.4%の子どもが身近な動物の死を経験していた。死に際する子どもへの説明は、実際に遺体に触らせる、火葬場へ連れて行きお骨を拾わせたという体験型、寿命の説明、死についての説明などの死についての説明型などがあったが、多くは、天国へ行った、お星様になった、など童話的説明をしていた。このこと

から、本当の意味での死の概念を伝えていない現状が明らかになった。

さらに Pearson の両側検定で、生命の大切さを子どもに伝える必要性と死について子どもに伝える必要性があると感じている人の相関について検討した。分析の結果、 $r=.593$ であり、就学然の子どもを持つ親の中で、生命の大切さについて伝える必要性を感じている親は、同時に死についても伝える必要性があると高く感じていることが明らかになった。

子どもへの死に関する説明の分類は、表1のとおりである。

表1 子どもへの死に関する説明分類

①非現実的説明	(1)のみ	20.9%
	(2)非現実的説明	15.9%
	(3)現実的説明	4.4%
②現実的説明	(1)のみ	7.7%
	(2)非現実的説明	22.5%
	(3)現実的説明	23.1%
③回避		1.6%
④その他		3.9%

#### 子どもへの説明

この結果を見る限りでは、現実的な説明をしている保護者が多いようにみえるが、実際はじめのうちは現実的な説明をしているにも関わらず最終的には非現実的な説明をしている割合が高いことに注目する必要がある(例えば、〇〇さんは死んでしまったから動かないのよ、だけど、天国へ行っていつもあなたのことを見ているからねなど;表2参照)。これらを踏まえると、表1の結果は、図1に再分類することができる。再分類の詳細は、①説明不可群・・・現実的+非現実的、非現実のみ、非現実+非現実、回避、その他、計64.8%、②説明可能群・・・現実的のみ、現実的+現実的、非現実的+現実的、計35.2%の2群であった。

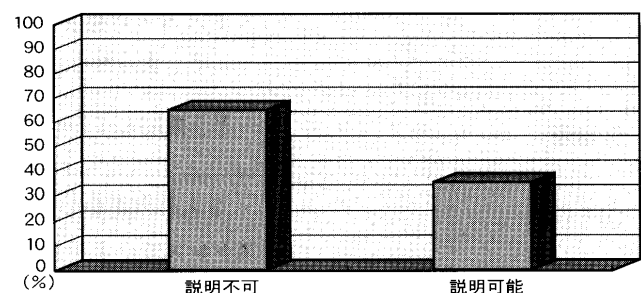


図1. 子どもへの死に関する説明について

表2 死に直面したときに子どもに説明した内容

①非現実的説明	(1)のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お空のお星様になった</li> <li>・空の上の天国に行ったよ</li> <li>・神様のところへ行ったんだね</li> <li>・仏様になった</li> <li>・天国へ飛んでいった</li> <li>・サンタさんと一緒に空へ行ってしまった</li> <li>・うんと遠くから見守ってくれている</li> </ul>
	(2) 非現実的説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空の家に帰って、今度は空から見てくれるからね</li> <li>・天使になって天国へ行くのよ、お空からいつも見守ってくれているよ</li> <li>・いっぱい楽しいことかなしいことを見たからもう満足と言って、今度はおじいちゃんと天国からみるよって眠ったんだよ</li> <li>・神様がよく頑張ったね、もう天国でゆっくりお休みって言って、神様と一緒に天国で暮らしているのよ</li> <li>・死んだら空の上のぼって行ってみんなのことをみてるんだよ。空の上からはいい子にしているか悪い子になっていないかせんぶ見えるんだよ</li> <li>・鳥が死んで土に埋めるとき、土にかえてお花になるよといった</li> </ul>
	(3) 現実的説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天国に行ったのよ、死んでしまったら、体がなくなってしまうのよ</li> <li>・天国に行っちゃったからもうあえないんだよと話し、火葬場まで子どもを連れて行き、その時々で感じたことを話して遺骨を見せた</li> </ul>
②現実的説明	(1)のみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おじいちゃん死んじゃったんだよ</li> <li>・もう動けないんだよ</li> <li>・生き物は人間と同じように病気になって死んでしまうんだよ</li> <li>・病気で具合が悪くなってなおらなかったんだよ</li> </ul>
	(2) 非現実的説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きている人や動物、植物には元気なときもあれば病気などで死ぬ。死んでも私たちのことを見守っている</li> <li>・じいちゃんの身体はなくなったけど、いつもあなたをお空から見守ってくれている</li> <li>・交通事故で死んだので、車にはねられたことを伝えた。一緒に骨になるところを見た。煙がのぼっていく時に「お空にのぼって仏様になる。いつもあなたのことを側で見守ってくれる」と説明した</li> <li>・死んでしまったらしゃべりたくてもしゃべれないし、動きたくても動けないんだよ。でも〇〇ちゃんたちのことは見えているからね</li> </ul>
	(3) 現実的説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・命が終わってしまっって、これから先もずっとねむったまんまで起きることはないんだよ。人はいつかみんな命が終わってしまうんだよ</li> <li>・葬式に連れて行き、周りの人の悲しむ姿を見せたり、火葬されてもう家には帰ってこないことを説明した</li> <li>・亡くなった祖父の身体に触れ、骨だけの姿になったところもみせた。みんなで死んでしまったらどこに行くのか考えた。</li> </ul>
③回避		<ul style="list-style-type: none"> <li>・どう説明していいかわからなかった</li> </ul>
④その他		<ul style="list-style-type: none"> <li>・3人の肉親を1年ごとに亡くした。自分自身が生きていけないほどのショックとストレスで、子どもとただ日々を送ってきたというのが本心。</li> <li>・自分自身がひどく悲しみ、涙していたのを見て、子どものほうから「大丈夫だよ、おばあちゃんはおそらからみているから」と逆に励まされた</li> </ul>

## 総合考察

本研究の結果から、高い割合で死について子どもに伝える必要があると感じていながらも、実際には現実的な説明で伝え切れていないことが明らかになった。

大人は子どもに物事を伝えるとき、子どもの能力を押し量って子どもに伝わるような形に変えて伝えているという数多くの研究結果があるが、“死”という概念やこの事実を伝えることに関しては、その説明の困難さから極端に童話的な説明になっていることが本研究では示された。しかし、真実を隠せば、子どもが納得するような作り事をつくらなければならないし、隠そうとしても子どもは気づく。親を亡くした子どもたちが集まる、アメリカのダギーセンターのディレクターは、2・3才の子でも、お菓子の隠し場所はすぐ見つけることや、子どもが環境にとっても敏感なこと、大人が隠していても、実は子どものほうで既に知っていて、親を困らせないために知らないふりをしているということを述べている。

また、身近な人との死別体験の有無が個人の対する態度に明確な差異をもたらすのは児童期までであること(丹下, 2004)、そして死の概念の発達 は児童期になるとある程度固定化され、死へのあこがれが見られるようになること(仲村, 1994)、以上のことから、死について子どもたちと考える時期について検討すると、

死の概念が形成される前の子どもたちに、体験を通して生や死について考えることができる Death Education Program を導入すること可能性が示唆される。今後の課題として、幼児期の子どもたちに Death Education Program を導入するために必要な、具体的な媒体や説明基準について検討する必要があるだろう。

## 【引用文献】

- (1) 澤井 敦 2000 現代日本の死生観と社会構造(上) 人間関係学研究(大妻女子大学人間関係学部紀要) 1(創刊号), 13-29.
- (2) 丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15(1), 65-76.
- (3) Speece, M. W., and Brent, S. B. 1984 Children's Understanding of Death: A Review of Three Components of a Death Concept. *Child Development*, 55, 1671-1686.
- (4) 岡田洋子 1998 子どもの死の概念 小児看護, 21(11), 1445-1452.
- (5) 筒井真優美 1998 子どもの死をめぐる課題 小児看護, 21(11), 1453-1459.
- (6) 藤井裕治 2002 子どもが考える「死の概念」の発達ターミナルケア, 12(2).
- (7) 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5(1), 61-71.
- (8) 坂田和子・牧正興 2003 Death Education Program 作成の試み(1) 九州心理学会第64回大会論文集.
- (9) 坂田和子・牧正興 2004 Death Education Program 作成の試み(2) 九州心理学会第65回大会論文集.